テーマ	グローバルな競争における 知的財産戦略は	適用分野	ＩＴ，バイオ、製薬、食品産業
研究名称	グローバル企業の戦略的提携と知的財産マネジメント	氏名所属	SHRESTHA M.L　教授 経営学部　経営学科

内容

●特徴

ＩＴ，バイオ、製薬関連のグローバル企業の分析

●研究内容

かつて「国境」というものが現在ほど意識されず、国によってマーケットが分けられていた時代には企業は生産規模を大きくすればする程、そのコストを国内で下げることが可能であった。そこでは、最も当該マーケットを支配した企業が勝者であった。この生産規模とコストの関係はマーケットによって異なる「経験曲線」で表されてきた。しかし、企業のグローバル化が容易に実現する時代になり、それぞれの国のマーケットで考えられていた「経験曲線」が限りなく世界で共通のものになり始めた。世界市場で１本化しつつある経験曲線上にあっては、どのような企業でも長期的に生き残れることは約束されていない。グローバル市場で生き残るにはグローバルな規模で累積生産規模の実現が必要となった。さらに、ＩＴに代表される技術革新の加速化、ネットワーク化の普及により、自社のコア・コンピタンスを狭く定義（選択）し、それに集中する戦略をとる企業が増え始めている。そして、それらの戦略の中で、企業は、合弁事業や合併買収とともに提携によりスキルを保管し、新しいビジネス機会に向けて対応を行うことが増えてきた。

一方で、現代の企業経営、組織経営において、競争優位の源泉としての位置づけが高まっているのが、「知的財産」である。しかし、知財の権利化、権利の主張だけでは、知的財産戦略とは言えない。知的財産戦略にはもちろん知的財産を出願、権利化する「知財出願戦略」があるが、それ以外に、自社が必要とする他社の知的財産権を直接的または間接的に購入したり、ライセンス供与を受ける「知財調達戦略」、さらには自社の持つ知的財産権を他社に販売したりライセンス供与する「知財活用戦略」、それとともに、知的財産そのものを提携の中で生み出す「知財創出戦略」があるからだ。後者３つの戦略は内実のところ、いかなるところまで他組織と提携を築くのかという問題にもなる。つまり、現代企業・組織にとっては、提携を考える上において、知的財産戦略の観点からもどのような提携が最も好ましいのかということこそが、重要な課題の一つになり始めているといえるだろう。しかしながら、本課題については、経営学においてもまだ十分な検討がなされていないのが現状である。

これらの状況を踏まえて、研究者は、米国スタンフォード大学、インド工科大学（ＩＩＴデリー校）にも拠点を置きつつ、編成が激しいＩＴ，バイオ、製薬関連の提携の実態を分析しつつ、同分野の知的財産戦略のあり方を調査・研究している。

キーワード	ＩＴ、バイオ、製薬産業、戦略的提携、知的財産、産官学連携
連携方法	■ 講演　■ 研修　■ 研究相談　■ 学術調査　■ コメンテート　■ 共同研究